

2月26日に医療・福祉領域で先駆的に連携教育に取り組まれている埼玉県立大学を訪問し、保健医療福祉学部社会福祉学科の朝日雅也教授と新井利民講師より、本学の教育GPに関連する貴重なお話しをお聞きしてきました。

埼玉県立大学は、平成17年度に特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）と現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）にダブル採択された連携統合プロジェクト（SAIPE）を全学で推進し、授業カリキュラムに「連携と統合科目群」を設けて、4年次の全学科学生を対象に「インタープロフェッショナル（IP）演習」を実施しています（平成21年度より必修科目）。このIP演習の運営に関するノウハウが本学の連携スキル合同演習を進めていく上で非常に参考になると感じました。このお話しの中、朝日・新井両先生は「連携教育とはリフレクションを重視した態度教育である」ことを強調されていました。その際、学生は「自分は集団の中で生かされているのか？」「他者を生かしているのか？」を考える必要があり、連携の成果よりそこに至るまでのプロセスが重要であると話されていました。

また、本学の教育GPは「医療・福祉領域の連携スキル学習プログラム」を開発することですが、このプログラムを専門職養成カリキュラムの中に組み込むことで、高い実践力と即戦力をもった人材を養成することができるようになると考えられます。すなわち、「1. 養成教育のどこに位置づけるのか」「2. 教育内容へどのように反映させるか」「3. どのようにして普遍化するのか」を明らかにすることが、本学GPを推進するために重要な点といえます。今回、すでに連携教育を実践されている朝日・新井両先生に、これらの点を社会福祉士養成の観点からお伺いし、本学GPに対する以下の様な示唆が得られました。

1. 養成教育のどこに位置づけるのか

従来の連携演習は個別の専門職養成課程で行われていたため、実践現場において「連携スキル」を有効に活用するためには、かなりの時間を必要としていた。しかし、合同演習を養成カリキュラムに開設することで、より実践場面を想定した環境の中で学習することができるようになるため、即戦力の人材を養成することが可能になる。

2. 教育内容へどのように反映させるか

演習内で学習した連携スキルを、実習科目、あるいは講義科目で活用することで、これらの科目をより具体的な学習へと深化することが出来るようになるだろう。例えば事例検討等の学習の際、関連職種の見点、考え方などを理解した上で、自らの専門性に立脚した支援方法を提示することが可能になる。

3. どのようにして普遍化するのか

開発した学習プログラムをテキスト化して社会に問い、建設的な批判を受けることで、より精査された学習プログラムへと発展し、普遍化することができるであろう。

また、今回の話し合いを通して、以上の3点をさらに効果あるものとするためには、連携スキルを学

習する以前の導入教育のあり方を検討する必要があると考えられました。いずれにしても資格取得の指定科目内に位置づけるのではなく、より高度な専門技術を習得するための、本学独自科目として連携スキル学習を位置づけることが望ましいと思われます。

最後に、お忙しい中、長時間にわたり対応していただき、多くの貴重な資料も提供して下さった朝日雅也先生、新井利民先生に心からお礼申し上げます。